



第1章 情報活用の世界

■この章の目的■

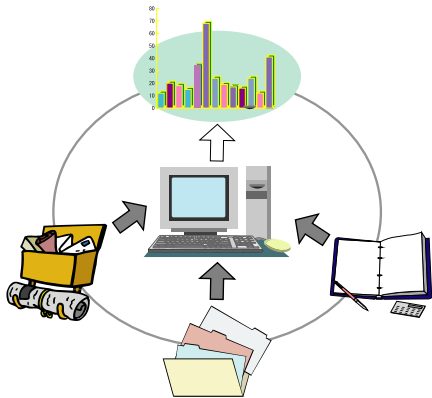
コンピューター・ネットワークの世界を知る
授業のサポート・ツールを使ってみる

| | |
|---------------------------|----|
| 1. コンピューター・ネットワークの世界..... | 2 |
| 2. ICT 活用事例..... | 3 |
| 3. 授業のサポート・ツール..... | 10 |

1. コンピューター・ネットワークの世界

情報=コンピューター?

現代は情報化社会といわれています。新聞、雑誌やテレビはもちろんのこと、インターネットを通じても様々な情報を簡単に手に入れることができます。このような社会の中で私たちは情報の波におぼれることなく、手に入れた情報をうまく活用していく必要があります。専門の授業でも、社会のどんな情報をどのように読み取るか、あるいは手に入れた情報をどのように処理して活用するかということが課題となります。



そのためにはコンピューターを使うのが便利です。データベースから情報を手に入れる、手に入れた情報をまとめて表にする、グラフを作成してデータの特徴を視覚化する、データから得られたアイデアをレポートにまとめる、意見をメールにして議論するなど、これらの作業はすべてコンピューター上で行われます。

このテキストは、情報を扱うための必要最低限のコンピューター技術について知ってもらうことを目的として作成しました。必ずしも「情報=コンピューター」ではありませんが、情報を活用していくときに欠かせないのもコンピューターだからです。

インターネットとは?

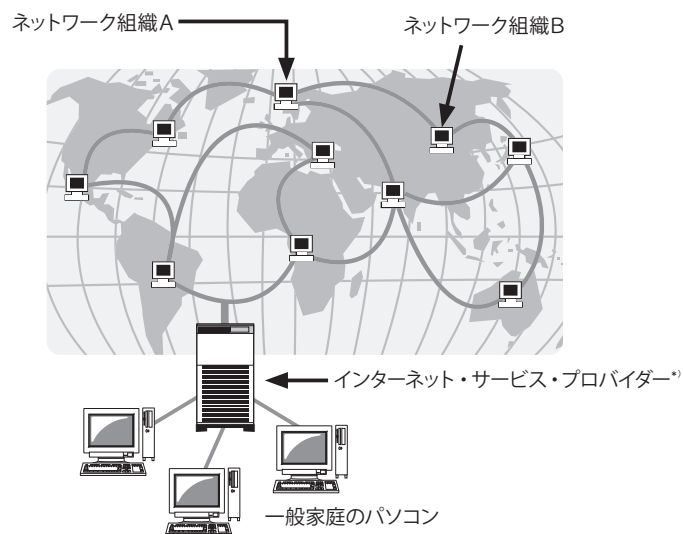
ネットワークがあちこちでできると、それらのネットワークをお互いにつなげばもっと便利になると考えられます。ネットワークとネットワークの間 (inter-)をつないだものがインターネットです。世界中のコンピューターネットワークが次々につながって、地球全体に網の目のように広がる大規模なネットワークができ上がっています。

この世界中にある無数のサーバーがクモの巣のように網目状に互いに結びついて、それらのサーバーに登録されている Web

ページを相互に検索・表示できるシステムのことを WWW (World Wide Web) といいます。

利用者は Web ブラウザーソフトを使って、世界中の文字情報、映像、動画、音声といったいわゆるマルチメディア情報を検索したり、閲覧することができます。

また、ホームページの文章中のある部分を選択すると、それに関連づけられた (リンクされた) ページや場所にジャンプできる「ハイパーリンク」というしくみによって、一つの情報から、関連する別の情報へと際限なくたどっていくことができます。



*) インターネット・サービス・プロバイダー (ISP: Internet Services Provider) インターネットに接続する業者や団体のことをいいます。個人でインターネットを利用する場合はプロバイダーと契約し、回線利用料金を支払う必要があります。

2. ICT 活用事例

情報通信技術 (ICT) の現状

総務省が年次で刊行している「情報通信白書 令和6年版」の特集②では、「進化するデジタルテクノロジーとの共生」と題して、AI、メタバース、ロボット、モビリティ（自動運転）等のICTを利用したデジタルテクノロジーについて、発展経緯や経済社会に及ぼす影響、国民の利活用状況・ニーズや課題・リスクへの対応、今後の健全な活用・共生に向けた取組・展望等を概観しています。ここでは、進化を続ける生成AIについて、その一部をご紹介します。

生成AIの急速な進化と普及

人間等の知的活動をコンピュータにより再現する人工知能「AI (Artificial Intelligence)」は、70年以上の開発の歴史のなかで進化を続けてきました。2000年以降の第3次AIブーム（機械学習の時代）では、ディープラーニング*¹⁾の基盤技術により、AIの性能が飛躍的に向上し、テキスト、画像、音声などを基に新しいコンテンツを生成できるAI技術「生成AI (Generative Artificial Intelligence)」が誕生しました。

2022年にOpenAIが大規模言語モデル (LLM) *²⁾を使って構築した対話型AI「ChatGPT」をリリースすると、わずか5日で100万ユーザーを獲得し、さらに公開から2か月後にはユーザー数が1億人を突破するという、これまでのオンラインサービスなどと比較しても驚異的なスピードでユーザー数が拡大しています。OpenAI以外にも、大手企業からスタートアップ企業まで多くの企業が生成AIの開発を発表し、世界的な開発競争が起こっています。日本の企業においても、日本語に強く、構築の過程や用いるデータが明らかな、透明性が高く安心して活用できるLLM開発に取り組んでいます。

主な生成AIサービスの種類と機能

| | 主なサービス | できること |
|--------|---|---|
| 言語生成AI | ChatGPT / CPT-4 [OpenAI] Copilot [Microsoft] * ¹⁾ Gemini [Google] * ²⁾ Claude [Anthropic] | <ul style="list-style-type: none"> ・質問、要約、計算、言い換え、翻訳、知識発見等 ・検索と組み合わせた対話的な文章生成 ・プログラミングの補助 等 |
| 画像生成AI | Stable Diffusion (ステイブルディフュージョン) Midjourney (ミッドジャーニー) Adobe Firefly (アドビファイアフライ) Imagen 3 (イマジンスリー) Canva (キャンバ) | <ul style="list-style-type: none"> ・テキストプロンプトをもとに画像生成 ・画像の一部編集、自動彩色、線画抽出 |
| 動画生成AI | Runway GEN-3 (ランウェイジェンスリー) RunwayML Gen-1 (ランウェイ エムエルジェンワン) Elai.io (イライ・アイオー) | <ul style="list-style-type: none"> ・テキストプロンプトから、高品質な動画を生成 ・既存動画から新たな動画を生成 ・テキストプロンプトから、デジタルアバターが出演する動画生成 |
| 音生成AI | MusicGen Synthesizer V So-Vits-SVC | <ul style="list-style-type: none"> ・音楽、効果音の生成 ・歌声生成 ・声の変換、声の言語変換 |
| その他 | — | <ul style="list-style-type: none"> ・テキストプロンプトや2D画像から3Dモデル生成 ・プログラムコード生成 ・分子構造の生成 等 |

*¹⁾ : Copilot は Bing Chat の後継 AI

(出典) 情報通信白書 令和6年度版「図表I-3-1-4 主な生成AIサービスの種類と機能」から作成

*²⁾ : Gemini は Bard の後継 AI

(各種公開資料より2024年12月現在の名称変更およびサービスを追加)

*¹⁾ ディープラーニング(深層学習):機械学習の手法の1つで、AIのプログラムに人間の脳の仕組みをシミュレートさせるニューラルネットワークという考え方を発展させた技術。ディープラーニングにより、画像認識や自然言語処理、シミュレーションなどができるようになり、カメラの画像から人間の顔を識別することや、ロボットの自律運転の最適化などへの活用が広がった。

*²⁾ 大規模言語モデル (LLM : Large Language Models) : 非常に巨大なデータセットとディープラーニング技術を用いて構築された言語モデル。人間に近い会話が可能であり、自然言語を用いたさまざまな処理を高精度で行える。

AIの進化に伴い発展するテクノロジー

AIの進化は、他のテクノロジーにも影響を及ぼしています。メタバースやデジタルツインなどの仮想空間サービスにおいては、2D画像・3Dモデルの自動生成やプログラム作成支援など、生成AIによって創作活動の一部の過程を簡略化することで、技術・知識的なハードルが下がり、利用者の拡大につながることが期待されています。

また、サービスロボット、自動運転等では、生成AIを行動生成AIとして、判断や駆動系にも使う試みがなされています。言語や画像などマルチモーダルな情報を解釈できる生成AIが、ロボットのカメラ映像などから周囲の状況を判断し、ユーザーからの指示を達成できるよう、ロボットの物理的な動作を繰り返すというものです。今後、生成AIが人との対話を通じて自らプログラミングができるようになれば、人の言葉を理解して即座にプログラミングし、ロボットを制御する未来も期待されます。

AIの進化に伴う課題と現状の取組

進化してきたAIは私たちの生活に便利さをもたらす一方で、活用にあたっては留意すべきリスクや課題も存在しています。特に生成AIの普及に伴って、偽情報・誤情報の生成・発信等リスクの多様化・増大が進むほか、知的財産権の尊重を求める声が高まっています。

2024年4月に総務省・経済産業省が策定した「AI事業者ガイドライン（第1.0版）」では、（従来から存在する）AIによるリスクに加えて、生成AIによって顕在化したリスクについて例示していますが、このような「リスクの存在を理由として直ちにAIの開発・提供・利用を妨げるものではない」としたうえで、「リスクを認識し、リスクの許容性及び便益とのバランスを検討したうえで、積極的にAIの開発・提供・利用を行うことを通じて、競争力の強化、価値の創出、ひいてはイノベーションに繋げることが期待される」としています。

生成AIの課題

リスク

事例

| | リスク | 事例 |
|-----------------|-----------------------|---|
| 従来型AIから存在するリスク | バイアスのある結果及び差別的な結果の出力 | ● IT企業が自社で開発したAI人材採用システムが女性を差別するという機械学習面の欠陥を持ち合わせていた |
| | フィルターバブル及びエコーチェンバー現象 | ● SNS等によるレコメンドを通じた社会の分断が生じている |
| | 多様性の喪失 | ● 社会全体が同じモデルを、同じ温度感で使った場合、導かれる意見及び回答がLLMによって収束してしまい、多様性が失われる可能性がある |
| | 不適切な個人情報の取扱い | ● 透明性を欠く個人情報の利用及び個人情報の政治利用も問題視されている |
| | 生命、身体、財産の侵害 | ● AIが不適切な判断を下すことで、自動運転車が事故を引き起こし、生命や財産に深刻な損害を与える可能性がある ● トリアージにおいては、AIが順位を決定する際に倫理的なバイアスを持つことで、公平性の喪失等が生じる可能性がある |
| | データ汚染攻撃 | ● AIの学習実施時及びサービス運用時には学習データへの不正データ混入、サービス運用時ではアプリケーション自体を狙ったサイバー攻撃等のリスクが存在する |
| | ブラックボックス化、判断に関する説明の要求 | ● AIの判断のブラックボックス化に起因する問題も生じている ● AIの判断に関する透明性を求める動きも上がっている |
| | エネルギー使用量及び環境の負荷 | ● AIの利用拡大により、計算リソースの需要も拡大しており、結果として、データセンターが増大しエネルギー使用量の増加が懸念されている |
| 生成AIで特に顕在化したリスク | 悪用 | ● AIの詐欺目的での利用も問題視されている |
| | 機密情報の流出 | ● AIの利用においては、個人情報や機密情報がプロンプトとして入力され、そのAIからの出力等を通じて流出してしまうリスクがある |
| | ハルシネーション | ● 生成AIが事実と異なることをもっともらしく回答する「ハルシネーション」に関してはAI開発者・提供者への訴訟も起きている |
| | 偽情報、誤情報を鵜呑みにすること | ● 生成AIが生み出す誤情報を鵜呑みにすることがリスクとなりうる ● ディープフェイクは、各国で悪用例が相次いでいる |
| | 著作権との関係 | ● 知的財産権の取扱いへの議論が提起されている |
| | 資格等との関係 | ● 生成AIの活用を通じた業法免許や資格等の侵害リスクも考えうる |
| | バイアスの再生成 | ● 生成AIは既存の情報に基づいて回答を作るため既存の情報に含まれる偏見を増幅し、不公平や差別的な出力が継続/拡大する可能性がある |


（出典）「AI事業者ガイドライン（第1.0版）」別添（概要）

インターネットによる情報の取得

検索エンジン・回答エンジン

検索エンジンとは、Google、Yahoo!JAPAN、Microsoft Bing などインターネット上の情報収集のツールです。いくつかのキーワードを入力したり、画像を指定して Web 上を検索し、検索結果の Web サイトをリストアップします。欲しい情報を素早く的確に得るにはいくつかのコツがあります。

最近では、Microsoft Copilot や Google の Gemini のような、AI が検索結果を要約し、質問に直接答えてくれる回答エンジンも注目されています。これらのツールは、自然な言葉で質問することで、より簡単に情報を得ることができます。


 詳しくは「第3章インターネットの情報収集-「2. キーワード検索のコツ」40 ページを参照してください。

RSS (Really Simple Syndication / Rich Site Summary)

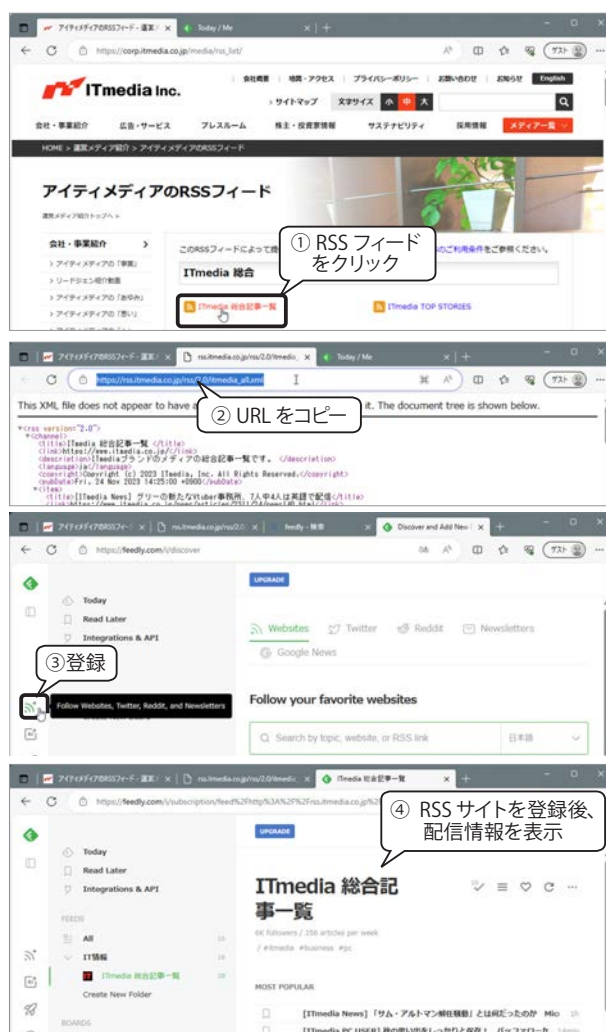
RSS とは、Web サイトの記事やブログなどの更新情報（タイトル、見出し、内容の要約、更新時刻など）を RSS フィードと呼ばれる XML 形式で配信する技術のことです。登録した Web サイトの配信情報は、RSS リーダーと呼ばれるツールを使用して自動的に取得します。

X (旧 Twitter) や Facebook などの SNS やニュースのキュレーションアプリなどの登場で RSS の利用者は一時減少していましたが、絶え間なく流れ込んでくるタイムラインではなく、必要な情報を自分でコントロールして取得できることから、最近は RSS が見直されてきています。

右図は、RSS フィードを RSS リーダー「feedly (フィードリー)」に登録して表示する手順を示しています。

- ①登録する Web サイトの RSS フィード  をクリックし、②表示された XML ページの URL をコピーします。
- ③「feedly」の Web サイトを開き、コピーした URL を登録します。④カテゴリの中から見たい RSS フィードを選択すると、配信された更新情報が表示されます。

※ RSS リーダーは feedly のほかに Inoreader、NewsBlur などがあります。いずれも PC では Web ブラウザーで使いますが、スマートフォンでは、Android 版、iOS 版アプリがあります。



メールマガジン

メールを利用して発行される雑誌や新聞のようなもので、発行者が購読者に定期的にメールで情報を届けるシステムのことです。発行元に自分のメールアドレスを登録することによって、次回発行時から届くようになります。メールマガジンで有名なサイトに「まぐまぐ!」があります。このサイトでは、カテゴリからメールマガジンを検索して購読希望の登録をしたり、メールマガジンを発行する手続きや設定を無料で行えます。

インターネットで情報を発信・交換する

ホームページ

インターネットから情報を得るだけでなく、あなたが作ったホームページをインターネット上のサーバーに送って、世界中に情報発信することができます。作成するには多少の Web の知識が必要になりますが、ワープロのように Web ページを作れるアプリケーションソフトも多数あります。

ブログ (ウェブログ)

ブログとは、日記形式の Web サイトのことで、誰でも簡単に自分のホームページを作成し、公開できることから、普及してきました。ブログを運営しているサイトが掲示板のような Web 作成ツールを提供し、データも管理してくれるので、Web の知識はほとんどいりません。

また、ブログ同士のリンクも自動で行えるので、ひとつのテーマに関連した記事が次々と繋がって、さまざまなコミュニティが形成されています。

SNS (ソーシャル ネットワーキング サービス)

SNS (Social Networking Service) とは、Facebook、X (旧 Twitter)、Instagram、Threads、LINE、Skype など、参加者が互いに友人を紹介しあって、新たな交友関係をを広げることを目的にしたコミュニケーションツールです。自作の写真や動画、音楽、絵、小説、メッセージなどを SNS 上に投稿することで、現実世界の枠を超えた多くの人々の共感を得るといったことが可能です。また、マーケティングに活用したり、災害時の情報発信・収集メディアとしても重要性が高まっています。SNS の利用状況を基に個人取引の信頼性を担保するなど、ほかのサービスとの連携も行われています。

インターネット上での違法・有害情報、偽・誤情報の拡散

SNS は情報の受発信が容易で、様々な情報をすぐに入手できることがメリットですが、近年、インターネット上でフェイクニュースや真偽不明の誤った情報などに接触する機会が世界的に増加しています。ディープフェイク*¹⁾ を活用して作成した偽画像・偽動画が、意図せず又は意図的に拡散するという事例も生じています。

SNS 等のプラットフォーム事業者は、利用者個人のクリック履歴などを収集したデータを分析し、その利用者が「最も強く注目しているもの・関心があるものを予測して優先的に配信する」というアルゴリズムを使っています。このような情報を受け続けると「見たい情報だけの膜 (バブル) に包まれる」=「フィルターバブル」と呼ばれる状態となり、見たくないものは排除 (フィルタリング) されるため、その存在そのものに気づきにくくなります。

また、SNS 等で自分と似た興味関心を持つユーザーが集まる場でコミュニケーションをとる結果、自分が発信した意見に似た意見が返ってきて、特定の意見や思想が増幅していく状態は「エコーチェンバー」と呼ばれ、何度も同じような意見を聞くことで、それが正しく、間違いのないものであると、より強く信じ込んでしまう傾向にあります。

このような問題に対処するためには、プラットフォーム事業者は信頼性の高い情報の流通を増やし、利用者が容易にそれらを参照できるような環境を整備するとともに、ユーザー自身も検索結果や SNS 等で表示される情報が利用者自身に最適化 (パーソナライズ) されていることを認識して、ファクトチェック*²⁾ できるように ICT リテラシー (デジタルリテラシー) を向上させることが重要です。

(参照文献：令和 5 年版情報通信白書)

*¹⁾ ディープフェイク：「ディープラーニング」と「フェイク」を組み合わせた造語。AI を用いて、人物の動画や音声を人工的に合成する処理技術。

*²⁾ ファクトチェック：問題となっている情報の内容の真偽、正確性を検証すること。

主な SNS とソーシャルメディア

Facebook (フェイスブック)

Meta (旧: Facebook, Inc.) が提供する SNS で、2004 年にアメリカの大学生の交流サイトからはじまり、日本語版は 2008 年に公開されました。実名登録を基本として友人や家族とのつながりを深めることを目的として、投稿や写真、動画の共有、コメントや「いいね!」を通じた交流が可能です。また、イベントの作成やグループ機能を活用して、趣味や関心ごとを共有するコミュニティを形成できます。さらに、企業向けには広告配信やマーケティングツールが充実しており、ブランドの認知拡大や顧客との接点を持つ場としても利用されています。幅広い年齢層に支持され、個人利用からビジネス利用まで多岐にわたる用途に対応しています。

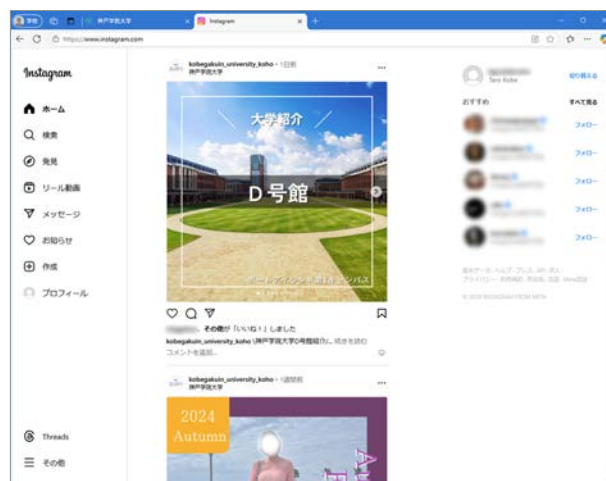


神戸学院大学の Facebook

Instagram (インスタグラム) ・ Threads (スレッズ)

Meta が運営する Instagram は、写真や動画の共有を中心とした SNS で、2010 年に登場しました。視覚的なコンテンツに特化しており、フィルターや編集機能を使ってクリエイティブな投稿が可能です。ストーリーズやリールといった短時間の動画機能も人気で、特に若年層に支持されています。ブランドやインフルエンサーによるマーケティング活動にも活用されています。

Threads は、2023 年に Meta が提供を開始した SNS で、Instagram と連携しています。テキストベースの投稿を中心に、会話やディスカッションを重視したシンプルなインターフェースで、短期間で急速に利用者を増やしました。特に、X の代替として注目されており、企業や個人が情報発信や交流に活用しています。



神戸学院大学の Instagram

X (旧 Twitter)

X Corp (旧 Twitter, Inc.) が運営する X は、2006 年に設立された SNS で、2023 年に「Twiit」から「X」へとブランド変更されました。短文投稿 (現在は最大 280 文字) を中心に情報を発信・共有するプラットフォームです。リアルタイム性が高く、ニュースやトレンド情報の収集、意見交換の場として広く利用されています。ハッシュタグ機能を活用することで、特定の話題やイベントに関する投稿を簡単に検索・参加できます。また、リツイートや「いいね!」を通じて他者の投稿を拡散することが可能です。個人利用だけでなく、企業や著名人、政府機関なども情報発信やマーケティングに活用しています。



YouTube (ユーチューブ)

YouTube は、Google LLC が提供する世界最大のオンライン動画共有プラットフォームです。だれでも無料で多くの動画を視聴することができます。ユーザー登録(無料)をすれば動画の評価やコメントを投稿したり、再生リストなどを作成することができます。YouTube の検索などで直接視聴できるものもあれば、特定のサイトや URL の経由のみで視聴できる限定公開も可能です。

また、サブスクリプションベースのサービスもあります。例えば YouTube Premium に加入すると、動画に広告が表示されなくなり、音楽のバックグラウンド再生やオフラインでも視聴できる事前ダウンロードにも対応しています。同時に音楽聞き放題の YouTube Music Premium も利用可能になります。



神戸学院大学の YouTube ラインナップ

LINE (ライン)

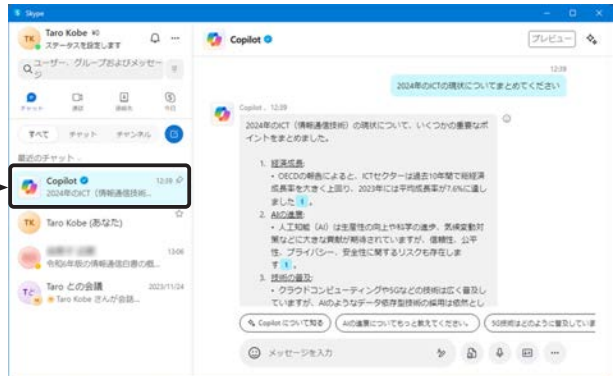
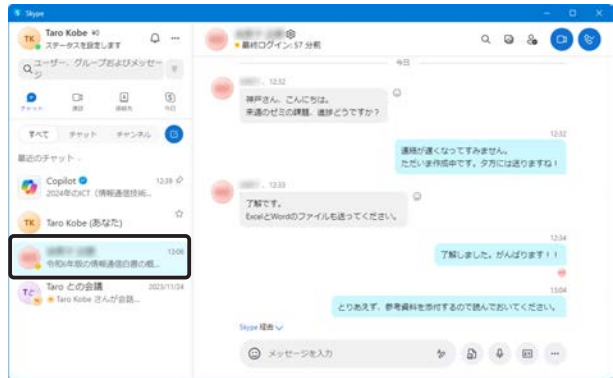
LINE ヤフー株式会社(2023年10月1日、LINEを提供するLINE株式会社とYahoo! JAPANを提供するヤフー株式会社が統合)が開発・運営しているアプリケーションサービスです。ユーザー同士であれば国内や海外、通信キャリアなどを問わず、24時間無料で音声通話やメッセージ交換が楽しめます。1日当たりのアクティブユーザー数(DAU)^{*}では、他のSNSと比べても、特に高い数字となっています。



神戸学院大学の LINE

Skype (スカイプ)

Skype は、音声通話、ビデオ通話、チャット機能を提供するコミュニケーションツールです。2003年に登場し、現在は Microsoft が提供しています。個人利用からビジネス利用まで幅広く対応しており、特に国際通話やリモート会議での利用が多いです。Skype-to-Skype の通話は無料で、固定電話や携帯電話への通話も低料金で利用可能です。画面共有やファイル送信機能も備えており、リモートワークやオンライン授業などの場面で活用されています。多言語対応で、世界中のユーザーに利用されています。PC(右図)やスマートフォンにインストールして使用しますが、Web ブラウザー上 (<https://web.skype.com/>) でも使用できます。




画面左側のチャット先一覧にある対話型 AI「Copilot」を選択すると、AI に質問して回答を得ることができます。

^{*} DAU (Daily Active User) : Web サイトやアプリ、その他のオンラインサービスを調査対象のある一日に実際に利用したユーザー数のこと。利用者の規模を表す指標の一つとしてよく用いられています。

生活密着型ツール

インターネットはとても便利な道具ですが、さまざまな危険も隠れていて、トラブルも少なくありません。特に下記のようなツールを利用する場合は注意が必要です。

 詳しくは第3章インターネットの情報収集「3. インターネットで得た情報の評価」43ページを参照してください。

インターネットショッピング (ネットショッピング / オンラインショッピング)

インターネット上に商店を構えた企業と一般消費者の B to C (Business to Consumer) 型の取引形態で EC サイト^{*)}と呼ばれています。インターネット上で商品を紹介し、受注、決済まで行います。オンライン書店から始まった Amazon.co.jp は、1社が独占的に提供する EC サイトとしては日本最大です。「ワンクリック」という1回のクリックで購入できる仕組みや、顧客が感想を書く「カスタマーレビュー」制、一定の条件下では配送料無料という戦略で取り扱い品目を増やしています。この他、国内最大の電子商店街「楽天市場」も有名です。



ネットオークション

インターネット上で消費者同士が直接取引を行なう C to C (Consumer to Consumer) 型の代表的な取引形態です。出品者は Web サイト上に、商品、最低価格、入札期限、配送・支払方法などの情報を掲載し、入札者を待ちます。期限内の最高値を提示した入札者が商品を落札し、後は本人同士が直接メール等で連絡を取り合い、取引をします。このようなオークションを運営しているサイトとしては、Yahoo! オークション (旧ヤフオク) が有名です。



インターネットバンキング

インターネット上の銀行で、預金の残高照会、入出金照会、口座振込、振替えなどのサービスが行われています。携帯電話でも利用できる銀行がほとんどです。PayPay 銀行や楽天銀行、ソニー銀行などは、店舗を持たないインターネット専門銀行で、ネット上での口座の開設、24時間対応、振込手数料が無料か低額、メールによる入金通知など、実店舗ではなかなかできないサービスも提供しているところが多いようです。

インターネットトレード / オンライントレード

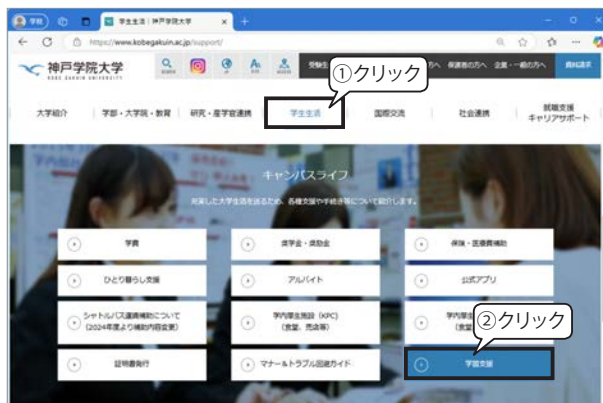
インターネットを通じて行なう株取引。パソコンだけでなく、テレビやゲーム機、携帯電話からも取引できます。ネット証券会社の Web サイトに接続し、オンラインで株の売買を行なう方式が一般的です。ネット証券の手数料定額制 (1日に何度売買しても規定金額以内であれば定額) と小額投資の手数料無料化によって、個人投資家が急増しています。中でも投機的な短期取引で生計を立てる個人投資家を「デイトレーダー」と呼んでいます。

^{*)} EC サイト：electronic commerce site (エレクトロニック コマース サイト = 電子商取引サイト)

3. 授業のサポート・ツール

本学Webサイトのトップページのメニューから①「学生生活」をクリックして画面を下にスクロールし、「キャンパスライフ」を表示します。②メニューから「学習支援」をクリックして「学習支援一覧」を表示します。ここでは、みなさんの学習や授業を支援するツールを紹介します。

- 教材ムービー・WEB教材
- Teams・Moodle

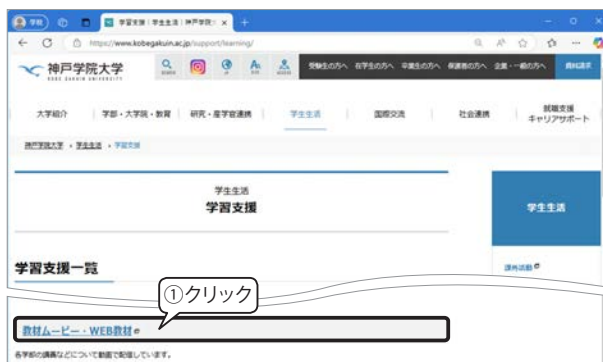


教材ムービー・WEB教材

学部別の講義・教材ムービー

学部ごとに講義の内容や教材を画像や動画で見ることができます。ここでは、法学部の「法制史教材—御裁き指南」を紹介します。

- ① 「学習支援一覧」から「教材ムービー・WEB教材」をクリックします。



- ② 「一般公開教材」の「教材一覧へ→」をクリックします。



- ③ 「法制史教材」から「教材ページへ→」をクリックします



④「法制史」の画面で「御裁き指南」をクリックします。

※「ヴァーチャル御白洲」のコンテンツは、2020年12月31日にサポートが終了したAdobe Flash Playerで制作されているため、現在は実行することができません。



⑤「御裁き指南」では御裁きの根拠となる、法や刑罰に関する史料を紹介しています。画像をクリックすると、

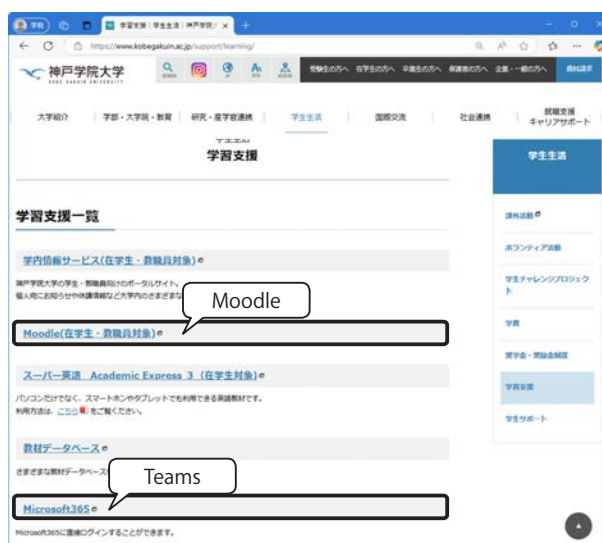
⑥ ポップアップウィンドウで大きな画像が表示され、右上のサムネイルをクリックすると見開き画面に切り替わります。



Teams・Moodle


本学で導入している Teams (チームズ)・Moodle (ムードル) は、先生から皆さんへ資料を公開したり、皆さんがレポートを提出したり、先生から皆さんへ通知を送るといったことをインターネット上で行えるシステムです。

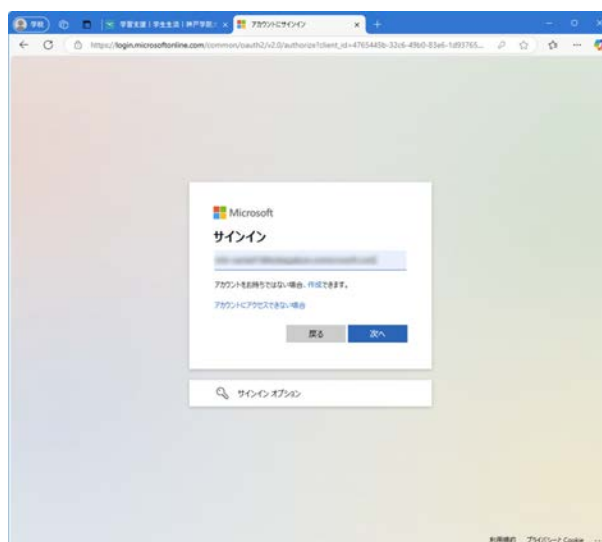
どのシステムも基本的な機能は共通ですが、先生によって、あるいは科目によって利用されるシステムが異なっていますので、シラバスや先生からの指示に従って各システムを利用してください。



Teams へのログイン


- ① 「学習支援一覧」から「Microsoft365」をクリックします。
- ② Microsoft のサインイン画面 (右図) が表示されるので、メールアドレスを入力して「次へ」をクリックします。
- ③ 「神戸学院大学 SSO システム」ログイン画面が表示されるので、ユーザー名とパスワードを入力して、
- ④ 「ログイン」ボタンをクリックします。

 レポートの提出方法については、「第5章レポートの作成と提出」「5. Teams でレポートを提出しよう」141 ページを参照してください。



Moodle へのログイン

- ① 「学習支援一覧」から「Moodle (在学生・教職員対象)」をクリックします。
- ② 「神戸学院大学 SSO システム」ログイン画面 (右図) が表示されるので、ユーザー名とパスワードを入力して、
- ③ 「ログイン」ボタンをクリックします。

 レポートの提出方法については、「第5章レポートの作成と提出」「4. Moodle でレポートを提出しよう」140 ページを参照してください。

